

紫式部集の成立

——その構造に関する考察を中心として——

管 野 美 恵 子

『紫式部集』が、いかなる作品として、どのような形を以て成立したのか、それを考究するに当たっての最初の問題は、この家集の原形も成立事情も、また、自撰集なのか他撰集なのかさえも未だ明らかでないことである。

現存する式部集の伝本は、歌数・歌序・本文の性質を基準として、第一類定家自筆本系統、第二类異本系統、第三類別本系統と大別される。このうち第三類本の系統は、本文の粗雑さに加え、勅撰集入集歌はその詞書に従い、また、第一類・第二类の何れを問わず、より精緻なもの、長大なものを採り上げるといふ、無定見な事大主義・精緻主義の編纂であって、伝本研究としてはともかく式部集の原形考察の対象としては用い難い。そこで本稿ではこれを省き、第一類・第二类の諸伝本のうち、それぞれ最も誤文の少ない善本と思われる実践女子大本と陽明文庫本を中心として、式部集の構

造とその成立について考察したい。

一

実践女子大本における65～67、70-71、74-75、111～118番の十二首は、異本系家集の本文には無く、その巻末に「日記歌」として収録されている^①。式部集の原形と変貌を考える上での一焦点となる箇所であるが、定家本系家集のこの部分と、異本系日記歌、及び現存紫式部日記とを比較してみると、定家本系家集と日記歌の詞書はそれぞれ独立するもので、相互関係にないことは明らかであり、日記歌の詞書は定家本系家集のそれよりもはるかに日記に接近していることが確認される。しかも日記歌は、日記に有って異本系家集本文に無い式部歌のすべてを載録し、その排列順序も現存日記のそれと完全に一致している。したがって、この「日記歌」は、その名称とお

り「紫式部日記」より抄出した歌と考えられ、更にその成立事情についても小沢正夫氏の「最初から異本式部集の附録として編まれたもの」つまり、「紫式部の家の集を編纂しようとした後人が、異本式部集と式部日記とを手にして、異本式部集に漏れてゐる日記の歌を『集』の巻尾に増補した」とされる説はまず疑いのないものである。ところがここに問題となるのは、その日記歌の巻頭五首、すなわちさきの65、67、70、71にあたる土御門殿三十講の日の歌群である。この部分は「日記歌」なる名称にも拘らず、現存式部日記に記事の無い寛弘五年五月五・六日の詠歌であるところから、従来現存日記の残欠非残欠の論議の的となってきた。が、しかし、そうした論議の検討はさておき本稿は三十講の日の詠歌を追うことによって日記歌のもつ性格について考察を進めることとする。

まず、日記歌(1)(2)は、中宮の懷妊という一門の慶事における道長の心情に沿うもので、明らかに女房としての公事の詠歌である。この日記歌(2)番「かがり火の」の詞書は、

池の水のたたこの下にかかり火にみあかしのひかりあひてひるよ
りもさやかなるを見思ふことすくなくはかしょうもありぬへきお
りかなとかたはしうち思ひめくらすにもまつそ涙くまれける

と式部独特の心情傾向を表現し、次の「おほやけごとにいひまぎらはす」へと続いていくのであるが、ここが定家本系諸本において

は、(66番)

その夜池のかゝり火にみあかしのひかりあひてひるよりもそこま
てさやかなるにさうふのかいまめかしょうにほひくれば

となつてゐる。傍点を施した「さうふの香云々」の一文は、その場
にいた者の実感からのみ出て来る文章であつて、おそらくはその日
そこここに匂つていたであろう菖蒲の強い香を印象的に受けとめた
作者自身の筆を思わせるものである。にもかかわらず、この一文
は、

66 かゝり火のかけもさはかぬいけ水にいくちよすまむのりのひか
りそ

という歌の内容とは何ら関係せず、歌を引き出すべき詞書の記述と
しては不用のものとなつてゐる。式部集の歌と詞書の緊密さについ
ては定評があり、こうした現象はこの家集としては異例のものと言
わねばならない。何故こうした未熟な詞書が出来たのか、疑問の残
るところである。

この箇所はまた、『栄花物語』における同日の記事を連想させ
る。

五月五日にぞ五巻に当たりたりければ、ことさらめきおかしうて、
捧物の用意かねてより心ことなるべし。(中略) ……池の篝火
にみあかしの光どもゆき交ひ照り勝り御覽せらるゝに、菖蒲の香

も今めかしようおかしう薫りたり。(はつはな)

榮花物語が紫式部と近い時代に作られ、その中宮御産の条は紫式部日記を資料としていることはすでに古く定説となっている。したがって、この法華三十講の日の記事についてもまた宮部清氏の提案の如く、^④榮花物語の著作時代、紫式部には寛弘五年五月の記事があり、榮花の右の一文は式部日記を参考とした、とみてよいのではなからうか。とすれば、定家本系家集の詞書もまた、日記の記述をもととして作られたものであろうことは容易に推察される。定家本系のこの詞書には何かもとになる文章があつて、詞書筆者はそれに束縛されたため詞書としてふさわしい文章を作り上げることができなかった、という場合を想定され、「そして、そのように詞書筆者を束縛牽制する力をもつもの資料というのはなにかといへば、紫式部日記が浮かんでくるのである。」と説かれる清水好子氏の見解は、^⑤まさに蓋然性を持つものであろう。

日記歌の詞書は、その(6)をみても、また(8)から(11)の贈答をみても、日記をかなり忠実に写している、と同時に、(6)番(きくのつゆ)では日記の「九日」を「九月九日」と改め、(12)とし(くれて)では歌の説明に不要な「御物忌におはしましければ御前にもまゐらず」の一文を削除するなど、作歌事情をより明確にするための作爲や工夫を施している。そこで、さきの66番の「さうふの香云々」の

一文も、もともと紫式部日記にあつたもので、日記歌の筆者はそれを歌に不用なものとして切り捨て、定家本系家集の編者はその文章の印象が鮮明であつたままにそれを入れてしまった、と考えられるのである。

続く67番「すめる池の」の詞書の「おはやげごとと言ひまぎらはす」という唐突な言い方は、日記歌(2)における「思ふこと少なくて……」という個人的な感慨があつてこそ生きてくる表現であり、この記述によつてはじめて67番の大納言の君の歌は、66番の歌の表面には表われない式部の心中と通い合い、この間の事情が明白になる。つまり67の詞書もまた、66とは反対に説明不足という点において家集の詞書としては充分といえないものである。「小少将の君」「弁の君」「加賀少納言の君」など、宮仕え中の贈答では相手の名を明らかにするのが常である式部集の、「むかひたまへる人」という異例の言い方も不審で、「歌に近い箇所を部分的に截り取つて転写した結果、このように例外的な、かつ不備な詞書が生まれたのだと思つ」^⑥という清水氏の説に従いたい。

68番「かげ見ても」の詠歌は、異本系家集では本文六一番に記され、返歌の69「ひとりゐて」は定家本系家集にのみ収録されている。定家本における贈歌「かげ見ても」の詞書は実に冗長な文章であり、「空のけしき春秋のかすみにもきりにもおとらぬころほひな

り」という一文の言いまわしは、その叙述的な冗長さ故に却って、いかにも式部自身の文章らしいものを感じさせるのであるが、家集の詞書としては66のそれと同様に、歌とは直接関係のない無用な情景描写である。小少将の「ひとりとるて」の返歌が、異本系家集の本文にもまた巻末の日記歌にも見えないことについては従来、日記歌の筆者が家集本文に返歌の無かったことに気づかなかったか、あるいは、日記歌付載の時期には未だ本文に存していたものが、その後脱落したかの何れかであろうと考えられている。しかしこの場合異本系六一の詞書は、

土御門院にてやり水のうへなるわた殿のすのこに居てかうらんに
をしかりて見るに

となっている。ここには式部が小少将を呼び出したいきさつは無論、贈答の相手がいたことさえも記されていない。土御門殿である日渡殿の局の前の簀子に坐って、ひとりやり水を眺めながらも思いにふけた時の歌、とみて充分納得できる詞書なのである。とすれば、これは、家集中にもと一対の贈答歌として記されていたものの返歌だけが脱落したのではなくて、異本系家集の編者は最初からこの歌を独詠歌として記載したとも考えられる。現存する異本系の諸伝本にこの部分は何らの異同もないことからそう考える方がむしろ自然ではなからうか。編者は何らかの意志のもとに返歌を省

き、独詠歌として一首を収めたと思われる。日記歌に返歌が記されなかったのは式部の贈答が本文にある以上、他人の歌のみを記す必要を感じなかったためであろう。

次の7071は新古今集にも採られた贈答である。新古今における詞書は、

局ならびに住み侍りける頃五月六日もろともに詠めあかしてあし
たに長きねをつつみて紫式部につかはしける

となっている。ところがこの詞書の「局ならびに住みはべりける頃」という句は、定家本系家集からも日記歌からも出てこない。小沢氏は「要するに三つの詞書の親近性はその原拠を三つのもの以外に求めなければ解決が出来ない」として、その原拠に今は散失している式部日記の冒頭部分を想定された。そうすると紫式部日記は新古今時代までは五月五日の記事を保っていたこととなる。^⑧

以上、定家本系家集における法華三十講の日の詠歌は、その後後に紫式部日記の影を濃く持っている。そしてその(想定される)散失部分の記述は、決して現存日記の基調を破壊するものではない。したがって日記歌は、寛弘五年五月五日六日の記事を持ち、現存日記をも含む「原紫式部日記」から抄出したものと推定されるのである。

現存する式部集伝本の各系統間の相違は、互いに異なる祖本から発生したことを証するものではなく、同一の祖本から生じた両者が、後世の転写途上においてそれぞれ、錯簡・脱落・誤写・補筆などを経験して分かれたものであろうことはすでに認められている。また、家集両系統ともに本文中に「破れてなし」・「不審」などの語が見え、同一箇所における贈答歌の欠落など、明らかに分岐以前からの乱れも多いので、この家集が相当早い時期から本文に乱れを生じていたこと、両系統に分岐したのはおそらく平安末期以前であろうことも現在定説となっている。

ところで今、その両系統の本文を比較してみる時、その詞書・歌の異同にはそれぞれ長短両所を持っていて、一概にどちらを祖本に近いとも定めがたいものがある。それではその構造面からの検討はどうであろうか。

「整然たる部立や秩序なき雑纂的な家集^④」とされていた紫式部集に、「多少の錯簡もあり、類をもって蒐めたところもあるが、ほぼ年代順である。」と、排列意識を指摘されたのは岡一男氏であり、氏はその見解のもとに紫式部の生涯を家集によって構築された。^⑤ それに対し今井源衛氏は、「御説の基本的な見解にはふかく敬意を払う」

とされながらも、その原則を逸脱する歌群もまた多く、類聚的排列意識も無視できぬこと、更に、家集のバランスを保つべく藝の歌たる恋歌をその全般に亘って散在せしめるなどの配慮もあることを説明された。

家集の排列をみるに、岡氏の説かれる年次的な意識がその底流に在ることは疑いえないし、また今井氏の指摘された如く家集の諸部分において類聚的な編纂意識が働いていることも明らかであるが、55番「ころろだに」の歌に至るまで家集の前半部はおおむね年次的な排列であって、系統別にもその構造にも殆んど異同をみない。ところが、家集の中ごろから両系統の排列にはかなりの差異が現れてくる。

最初に乱れの見えるのは、56「身のうさは」〜59「みよしのは」(異九一〜九四)の歌群である。異本系家集においてはこの歌群は、九〇「おほかりし豊の宮人」と、九五「みかさ山おなじふもとを」の中將の君の贈歌との間に位置している。九一「身のうさは」が「はじめてうちわたりをみるにも物のあはれなれば」とある詞書から、明らかに初出仕の感慨を詠んだ歌であるのに対し、九〇「おほかりし」は日記により、宮仕え生活にもすっかり馴れた寛弘五年十一月の作であることが知られる。また、九五「みかさ山」も年時は不詳ながら、仲の良い同僚女房と気のおけないひと時のやりとりを楽しんでいる様が

うかがわれて、いずれも九一・九二の詞書にある「まだいとうゝるしき」物馴れぬ様子とは大分年月の隔たりがあることが推測される。即ち詠歌の時期としては九〇と九五の關係の方に近接性が感じられるのである。定家本系ではこの四首を家集の中ごろに、出仕生活ではじめてのものとして収めている。続く歌群は、60「やよひばかりに」宮のおもとより出仕を促されての贈答、以後77番「しらつゆは」に至る迄出仕以後の歌が続いている。つまり、定家本の排列は、

56 ……寛弘三年十二月廿九日、初出仕の感慨

57 58 ……宮仕えに馴れぬさまで宿下がり

59 ……里からの献歌（正月十日）

60 61 ……出仕の督促とそれへの返し

といったものとなる。59番の「まだいでたちもせぬかくれかにて」の詞書も、出仕の挨拶を済ませて一旦下がったまま、まだ出仕もしないでいる里邸で、と考えると落ち着く内容なのである。なお「かくれかにて」とあるのは実践女子大本と瑞先寺本のみであって、他は両系統ともすべて「かくれにて」となっている。従来これを「源氏物語執筆のための隠れ家」と解されてきたが、これは華やかな宮中に対する「かくれ」、即ち、草深く埋もれた物かげのような我が家、の意と考えたい。「むすばほれたる雪の下草」といった比喻からもその方が妥当ではなからうか。

次の60・61は、春三月、里居を続ける式部と弁のおもとの贈答である。贈答は「氣にそまぬ宮仕えの日々でしようけれど、元氣をお出しになってそろそろ出仕なさっては如何」という催促を言外にこめたもので、式部の心情を思いやりながらやわらかく出仕を促しており、我が身にも覚えのある人の同情をこめた歌である。対して式部は、「いと憂き世に乱れてぞふる」と、尽きることのない物思いに思わずも長い里居を続けてしまいました、と返している。続く62「わりなしや」は、同僚女房たちの悪意ある中傷に心中強く抗する式部の、昂然たる氣概を示す歌で、60における「うきことを思い乱れて」とは意味の上での繋がりをもつものである。従ってこれらの歌群では定家本系家集の方に明確な編纂意識をみることができ。おそらくはこの方が原形であって、異本系の方には何らかの錯簡が起ったものと察せられる。異本系の諸本には宮の弁のおもとの贈答のみがあって式部の返歌はない。これは明らかに欠落であり、こうしたことも異本系家集のこの部分に錯簡のおきたことをいっそう強く感じさせるものである。

次の乱れは78「わするるは」と79「たかさとも」の二首（異六二六三）と、121「くれぬまの」126「なき人を」（異六四～六六）の三首に起きている。異本系家集ではこの五首は、68（六一）「かけみても」と72（六七）「あまの戸の」の間に位置している。が、121～126の歌

群は、小少将亡き後の歌であるから、年代的には当然定家本系の排列によるべきであると同時に、後述するようにこの贈答は、家集の最後に位置する歌として大きい意味を持っている。したがってこれもまた、異本系家集の場合には何か物理的乱れの生じたものと思われる。あるいは綴じ目が切れるというようなことがあって、72(異六七、六八)と同じ小少将の君に関する歌であるところから、関連を見出した編者がここに置き直したものであろうか。なお、この五首と、定家本系家集のうちの「日記歌」と重なる部分とを除いて考え、60(五一)「うきこと」から76(六九)「をみなへし」への連なり方は両系統同じものとなる。これは何か祖本の形を暗示してはいないだろうか。

こうしてみると異本系家集には、本文的にも構造的にも相当の誤脱・錯簡が有ることが認められ、この限りでは定家本系の方が祖本に近いということができそうである。

これら排列の乱れとは別に、両系統間に大きな差異のみられるのは、前節でふれた「日記歌」に相当する部分である。今井源衛氏は、異本系家集が「本文系統的に見て一類本に劣る」ところから、これも定家本の形が両系統の祖本に近いものと推定された^④。とすれば、異本系ではこれらの部分が脱落したか、または意図的に削除された、ということになる。ところが、異本系家集における日記歌部分の欠

紫式部集の成立

落は決してまとまった歌群としてではなく、六〇と六一の間に三首、六一と六二の間に二首、六八と六九の間に二首、一〇八と一〇九の間に五首、といった形で起こっている。このように不自然な脱落が、しかも日記と重なる部分においてのみ起こり得るとはとうてい考えられないことである。かと言って、意図的なものとすれば、何のために削除したと考えるのか、日記に見える歌をすべてというわけでもない。山口たけ子氏は、「異本はその集中の日記の歌を後に更に残缺になった『日記歌』に照らして誰かが削ったのではないか」と推測される。だが、「日記歌」は日記中の歌の集として独立していたものではなく、逆に異本に見えぬ日記の歌を集めて家集に付加したものであることは既に述べた。更に、紫式部集を書写し、伝えようとする者が何故にその歌を削るのか、意図的な削除と考えてもそこには説明しがたい疑問が残る。すると、考えられるのは、定家本家集編者の補筆ということにならうか。

法華三十講の日の歌群のうち、「日記歌」と重出する定家本系家集の歌の背後に、濃い日記の影が認められることは前述したとおりである。また、それら日記歌と重なる歌を、家集の前後における関係でみると次のようになる。

65～67、69～71（法華三十講の歌群）

……63 64の五月五日の歌と季が一致。72 73は69～71と同様に小

少将との贈答。

74 75 (道長との贈答)

…… 72 73 と水鶏の歌題が一致。76 77 は同じ道長との贈答。

114 (倫子より菊の綿をおくられて)

…… 113 とは季が一致。そのうち小少将、大納言の君との冬歌の贈答に続く。

現存紫式部日記と比べると、家集における日記所載歌の排列には時間的な乱れが目立つのであるが、そこにはこうした季や人物による連想をもとにした類聚的編纂意図がうかがえるのである。このように事実の時間的推移に拘泥せず、季節的・人物的類聚によって歌を配してゆくやり方は、事実の記憶に拘束されることのない他撰歌集に多い手法である。そして、前節で指摘した如く、60「うきこととを」から76「をみなへし」に至る配列は、日記歌と重なるこれらの歌群と異本系における前記の錯簡を除く時、西系統は同一の排列となる。以上のことから考えれば、これら「日記歌」に相当する歌群は西系統の祖本には存在しなかったものであり、後人による補筆と考えるべきと思われる。

こうして、一・二節の考察からは、定家本から日記歌と重なる部分を除いたものが西系統の祖本の姿であった、との結論に達した。その祖本の構造と成立については次節において検討する。

三

紫式部集の詞書は、往々にして「式部の個人的・主観的な・直接心情の表現」であり、式部自身でなければ書けぬものであることを感じさせる。家集における詞書と歌とは緊密に結び合い、その中から歌だけでは味わいきれぬ式部の微妙な心情が見事に浮かび上がってくる。こうした特性については従来も諸氏によって論及されているところであるが、次に掲げるような叙述性の強い詞書も、やはり作者の自筆を思わせるものである。

○ その人とをきところへいくなりけり。あきのはつる日きたるあかつきむしのごゑあはれなり。(実践女子大本2番)

○ かもにまうてきたるにほととぎすなかなむといふあけほのにかたをかのごすゑおかしく見えけり。(13)

○ 返しはにしのうみの人なり。(16)

○ つくしにひせんといふところよりふみをこせたるをいとはるかなるところにてみけり。(18)

○ ふみちらしけりとぎゝて……む月十日はかりのことなりけり。(32)

○ わつらふことあるころなりけり。……心みによまむといふ。(97)

勅撰集をはじめ、他の私撰集・私家集においても詞書は多く「……ける」といった連体形をとるか、「……ければ」「……の心を」「……とて」といった形をとっており、上記のように終止形でとめる詞書の多いことは紫式部集の特徴といえるものである。他の家集に見える一般的な詞書が、単に歌の背景の説明としてのみ意味を持つのに反して、式部集のような形は、(歌物語の地の文にこうした形が多いことから察せられるように)、詞書の独立性を強めるものであり、歌の背後にある事柄や人物への作者の関心の深さを示すものである。そこには自身の過去を回顧し、それを再び自己の中で噛みしめることによって、思い出の中の事件と人間像を鮮明に再現しようとする作者の強い詠嘆がうかがわれて、家集の詞書は作者自身のもの、との感を抱かせる。

またその構造を見ると、家集前半部はほぼ年代的排列による自伝風の構成となっており、そこには自身の辿ってきた人生を回想しようとする意志がかなり強く感じられる。少女時代の詠歌から始まり、越前下向、宣孝との結婚、死別、出仕の決意、と順を追って進められる中にも、西の海へ行った友との一連の贈答や、28から37に収められた帰京から結婚に至るまでの屈曲を語る歌群などは、時間と事件の推移に従って、さながら物語の展開を追うが如き筋の進展がある。さらに、44から48の歌群は絵による類聚歌群であるが、48

紫式部集の成立

番は塩がまの浦に立ちのぼる煙に、夕の空に逝った宣考への哀傷を歌い上げて、42「ゆふぎりに」43「ちるはなを」の継娘とともに亡夫を偲んだ歌に対応させ、一連の類聚歌群に、夫没後の淋しい生活心情を語る歌としての趣きを持たせている。こうした細い配慮にもとづく構成も、おそらくその歌の作者以外には為し得ないことであろう。こうした家集前半部に対し、後半部は、56「身のうさは」の初出仕の歌から最後の小少将への哀傷まで、出仕生活の歌・宣孝との恋愛・結婚生活における贈答歌や独詠歌が交錯して配されている。

たまさかにかへりことしたりける人のちに又もかゝさりける
にをとこ

90 おり／＼にかくとは見えてさゝかにのいかにおもへはたゆるなるらん
るらん

返し九月つこもりになりにつけり

91 しもかれのあさちにまよふさゝかにのいかなるおりにかくとみ
ゆらん

おそらくは出仕以後の歌であろう。単に「かく」を言い出すための枕詞として男の用いた「ささがにの」の語を受けて、式部は「九月つごもり」という折から、霜枯れの野に弱々しくさ迷う蜘蛛の姿を自分にたとえ、「いかなる折にかくと見ゆらん」と穏やかながら明確な拒否の歌を返している。拒みながらもたまさかには歌を交し

合わねばならなかった相手とは、それが身分ある男であったことを想像させるし、「霜枯れの……」の比喩は夫に死に遅れた自己の姿を表現したと見るべきで、これが出仕以後の歌であることを思わせる。ところがこれに続く92〜95は宣孝とのものである。この排列などは、90 91の贈答が回想の契機となつて、「霜枯れの浅茅に迷う」現在の我が身にひきかえ宣孝在世当時を偲び、心の限り呼びかけた若き日々を反芻しているとも考えられるのである。だが、後半部における恋歌の詞書は、前半のそれと比べて著しく単純化され、一見宮仕え中の贈答ともみえる形をとつて配置されている。それによつて後半に位置する宣孝関係の詠歌は家集の構成上それほど不自然な形とはならず終っているのである。

なお、結婚生活における歌のうち、前半部は幸せな生活を連想せしめるもののみを出して、そのまま亡き夫を偲ぶ歌群に移つて突然襲つた不幸を強調し、夜離れの嘆きを歌う歌群は後半部に位置せしめていることは重要である。このため家集の前半部は、明るくみずみずしい情感をもつた躍動性のある若き式部像と、夫の死後、日々に淋しさの募つてゆく姿が対照的に現われるのに対し、後半部では必死により豊かな自我の開花を求めながら、結局は何ごととも思ひのままにはならず、常に我が心とはうらはらの状態で過こしつづけ、ついには「ふればかく憂さのみまさる世」¹²³の述懐に到達する

よりほかなかつた自己の「生」の有り様を噛みしめている作者の姿が迫ってくる。単なる錯簡ではこういった現象は起こり得ないと思われるので、ここにも式部自身の意志が感じられるのである。しかし、それでは一首一首の歌の配置はどのような意味を持っているのかと考えると、それぞれの歌群の前後関係には未だ不明なものが多く、部分的にはその構成意図がうかがえるものの、種々の面において未定稿の感が深い。

このように紫式部集は、大部分において式部自身の手になる自撰家集と思われるのだが、そう言い切ってしまうにはなお疑問が残るのである。結論を先に言つと私は、前節で論じた「祖本紫式部集」には式部以外の手に成る部分もある、少なくとも紫式部日記と重複する詠歌は他人の撰による入集であろう、と考えるのである。これは既に清水好子氏も提案されていること¹²⁴であるのでそれに付加する形でまとめてみたい。

まず前節で述べたように、日記歌と重なる部分は日記からの抄出であり、おそらく後人の加筆であると思える。また、日記と重なる詠歌の詞書はいずれも日記の記述の要約、もしくは抄出であつて、そこには新たに付加された事情及び描写を見出すことはできない。つまり、これらの詞書は、集中の多くの詞書とは異なり、他人の手によつて書かれることも可能なものである。敢えて言おう。もし

式部自身の手によるものならば、改めて家集に入れようとする場合には必ず加筆修正がなされる筈ではないだろうか。

家集99番の歌は、

ちしうさいしゅうの五せちのつほねみやのおまへいとちかき
にこうきてんの右京かひと夜しるきさまにてありしことなど人
々いひたてゝ日かけをやるさしまきはすへきあふきなどそへ
て

おほかりしとよのみや人さしわきて

しるき日かけをあはれとそみし

となつてゐる。ところがこの歌に関する日記の記述は「大輔のおもとしてかきつけさす」とあつて、歌の作者は明らかにされてない。日記では自分の歌と明記することを意図的に避けた、とも思われるのだが、後拾遺集もやはりこの歌を「読人知らず」と記している。^⑧詞書からみても後拾遺集は明らかに日記からの入集であるのだが、では後拾遺の撰者は家集を見なかったのか、と言うと、集中59の場合には

正月十日のほとにはるのうたゝまつれとありければまたいて
たちもせぬかくれかにて (家集)

一条院の御時、殿上人春の歌とて乞ひはべりければよめる

紫式部(後拾遺集)

紫式部集の成立

とあつて、これは家集を下敷にしている。即ち後拾遺集の撰者は式部集を手にしたのである。にも拘らずこの歌が「読人知らず」と記されたのは何故であろうか。後拾遺集のできた頃、というより後拾遺集の撰者の手にした式部集には、未だこの歌が記されていない、と考えることはできないだろうか。

そうしてこれらの現象よりもいっそう強く他人の手を感じさせるのは、日記中の歌の殆んどが載録されながら、寛弘五年十二月廿九日の次の詠歌が見当たらずという事実である。

としくれてわが世ふけゆく風の音に

心のうちのすさまじきかな

「さもないぎとき履のしげさかな」と、もの珍らしげに話す若い同僚のことを「色めかしく」と聞く式部は、その繁き履音にも何の関心ももてない老女房なのである。我が老を思う彼女の心を木枯らしが吹きぬけてゆく、もはや男も女もなく、ただひとり荒涼たる世界に佇む姿がここにはある。それはまさに「すさまじ」き世界であり、そこに到るよりほかに道のないままに「立ち馴れ」てしまった我が「うとましの身」なのだ、散文と歌とは互いに響き合つて緊迫した自己観照の歌を創造している。この独詠歌が家集に入れられなかったのは、おそらくはこの「すさまじ」の語の故であろうと思われる。

小町谷照彦氏も指摘されるように、^⑨「すさまじ」は「歌語として

は異端なもの」であり、勅撰集にも三例しか見ることができない。

山里の風すさまじき夕暮にこの葉乱れて物ぞかなしき

(古今集・藤原秀能)

跡たえてうつまぬ霜ぞすさまじき芝生が上の野辺の薄雪

(風雅集・院冷泉)

冬枯のすさまじげなる山里に月のすむこそ哀れなりけれ

(玉葉集・西行)

三首ともに式部の時代よりずっと後の中世の歌集に収められている。木之下正雄氏は「すさまじ」の意を「感興を基準とした対象の価値批判の表現で、アハレ・ユカシ・面白シと対する語である。語源はサブの形容詞化で、適度を逸脱しているので、今まで持っていた興味が冷却するようなどという意味である」と説明される^③。この語が自然を描写するときその自然は、源氏物語によれば、冬の雪景色に冴える月光の凍てついた冷たさであり、また蕭条たる冬枯れの山を吹きすさぶ風の音である。それは小野村洋子氏が「総角」における冬の月を評して、「寒夜の雪後の月は宇治十帖に交流する中世的ともいふべきストイックな精神乃至宗教的なものの象徴である。」と説かれたように、王朝的な雅びの世界とはかけ離れ、古今集の自然美たる飛花落葉の哀調とは異質の、冷厳な、或は凄惨な自然のたたずまいなのである。王朝の貴族、なかんずくみやびの世界のただ中に

生きる宮廷女房たちは、決してそうした様相の中に美を見ることはない。彼らの胸中に溶け込み、その心情と融合することのない対象には、彼らの心は冷たく閉ざされてしまうのである。そうした対象が王朝的詠嘆の所産である和歌の中に現われないのは当然のことであった。それらは和歌にふさわしくない「すさまじ」きものであり、そうした対象を詠むのもまた、和歌的抒情にふさわしくないことなのである。

こう考えてくると、式部のこの一首が家集に採られなかったのはむしろ自然のこととさえ思えてくる。それは当時の和歌的抒情の世界からはあまりに遠いものだったのである。しかし一方、それ故にこそこの詠歌は、当の式部自身にとってはかけがえのない一首だった筈である。散文の世界でこそしばしば用いられても和歌には例のない「すさまじ」の語を敢えて用いようとするとき、それは彼女の辿りついた果てもない闇を形容する唯一絶対の表現であったと想像される。吹きすさぶ木枯らしに自分の心のさまを観る式部の絶望感には、もはや王朝的抒情を越えねばならぬものだったのであろう。したがって、日記の歌から家集に入れる歌を選んだのが紫式部自身であったならこの歌こそまず採られねばならないのに対し、式部以外の人に依れば、むしろ選ばれない可能性の方が強いと言えるだろう。そしてそうした王朝的な和歌の選択眼を持つ可能性の最も強い人々

を想定してみるなら、そこには当時の女房と呼ばれる人々が浮かんでくるのではないだろうか。

こうして私は、少なくとも紫式部日記と重複する歌は後人の手による補入であろう、と考えるに至った。もともと紫式部は、既に書き終えてしまった日記に在る歌を除いて、未整理の歌をまとめて家集を編もうとしたのではないかと想像するのである。

四

めぐりあひて見しやそれともわかぬ間にくもかくれにしよはの月かけ

家集冒頭を飾るこの一首は、あたかも式部集の織りなす世界を象徴しているように感ぜられる。この歌が冒頭に現われたとき、「見しやそれともわかぬ間に」たちまち雲に隠れてしまった月影は、幼友達をさすと同時に、自分の夢多い少女時代への尽きぬ名残りを暗示するものとなってきはしないだろうか。そして式部にとって人生とは、これまた「それともわかぬ間」に移ろいゆく一瞬の幻影の連続であった。彼女は家集において、忌憚のない幸福な結婚生活を描くかと思えばすぐに夫の死を嘆く我が身を描き、新しい生活を期して心はずむ帰京の歌にはたちまち夫の心交わりを悲しみ、訴え、諦めようとする歌群を連ねている。それが式部の観た現実であり、自

己の人生そのものであったのだろう。

ある日反故を整理していた式部は、あの懐しい小少将の君の文を見つめる。互いに心を許し合ったその人も、已にこの世の人ではない。「うちとけ文」を見るにつけても人の世のあはれは胸に迫ってくる。

暮れぬ間の身をは思はて人の世の

あはれを知るそかつはかなしき

誰か世になからへてみむかきとめし

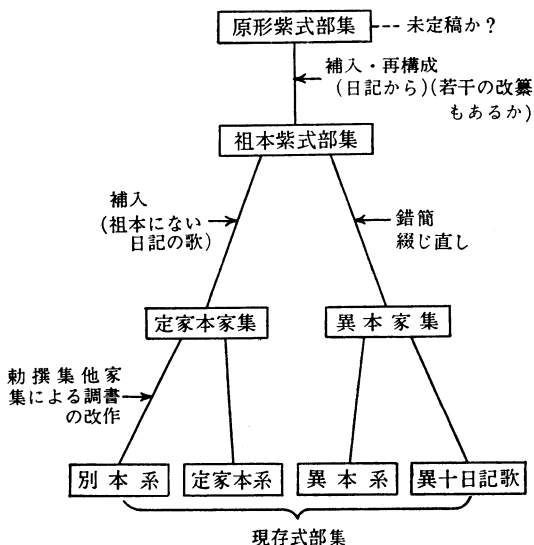
あとは消えせぬかたみなれとも

家集の冒頭と終末は互いに呼応し合って、空莫たる人の世を見つめる式部の、しみじみとした悲哀と諦観の情趣を創り上げている。

排列の細部に疑問は残りながら、式部集はやはり見事な一個の統合体なのである。

最後の贈答歌はおそらく式部の最晩年のものと思われるので、自分の生涯の歌を集めて家集を編もうとしていた式部は、前半部をすっかりまとめ上げ、後半も一応の形に並べながら、結局未定稿のまま世を去った、と私は想像してみるのである。そうした未定稿家集に日記から選んだ歌をも加え、季節の推移などを考えて、排列などもし直した人があったのではないか。すなわち祖本の編者であるが、そのようにして式部の家集をよりまとまった形で是非遺したい

と願う人、式部に強い愛着を持っている女房、たとえばそこに式部の娘大式三位を描いてみるのはあまりに早計であろうか。最後に本稿で考察した式部集の成立過程を簡単に図示すると次のようになる。



注

① 但し巻末に日記歌をもつのは、異本系家集のうち、陽明文庫

本・也足叟本・桂宮蔵書本・常樹本の諸本である。
この場合「日記歌」とは、異本赤染衛門集と合本された雑纂本日記歌ではなく、異本紫式部集巻末に付加された一七首の原形日記歌をさすものとする。

② 「紫式部日記考——日記歌による日記の原形推定は可能なるか。」(『国語と国文学』昭和十一年十一月号)

③ 以後日記歌の番号は()をもって表わし、定家本と区別する。

④ 「紫式部集について」(『国語国文』昭和十一年九月号)

⑤ 「紫式部集の编者」(関西大学『国文学』第四六号)

⑥ 注⑤と同じ。

⑦ 以下異本系家集(陽明文庫本による)の歌番号は漢数字によって記すこととする。

⑧ 注②と同じ。

⑨ 藤原定家の「明月記」には、式子内親の月次絵の記述があり、

件絵書十二人之歌被分……五月紫式部日記既集とある。即ち定家の見

た『紫式部日記』には五月五日の記事が有ったわけであり、新古今の記述が日記からとられた、と考えることと矛盾しない。

⑩ 注④と同じ。

⑪ 『源氏物語の基礎的研究』（東京堂、昭二九年）第二部紫式部の作品上。

⑫ 「紫式部集の復元とその恋愛歌」〔文学〕昭和四〇年二月号）

⑬ 式部の出仕年代については、寛弘二年説・二、三年説・三年説・四年説とあるが、私は萩谷朴氏の「紫式部の初宮仕は寛弘三年十二月二十九日なるべし」〔中古文学〕第二号）などに論じられたように三年と考えたいと思う。

⑭ 注⑫と同じ。

⑮ 「紫式部日記は残缺なるべし——異本紫式部集及び紫式部日記歌よりの考察」〔文学〕創刊号）

⑯ 南波浩教授『紫式部集の研究』（笠間書院・昭四七年）

⑰ 注⑤と同じ。

⑱ 後拾遺集第十九 雑五

中納言実成宰相にて五節奉りけるに妹の弘徽殿の女御の御許に侍りける人かしづきに出でたりけるを中宮の御方の人々ほかに聞きてみならしける百敷をかしづきにてみるらむ程をあはれと思ふらんと言ひて箱の蓋にしろがねのあふきに蓬萊の山つくりなどしてさしぐしに日影のかづらを結びつけてたきものをたてぶみにこめてかの女御の御方に侍りける人のもとよりとお

ぼしくて、（但、国歌大観による）

⑲ 「紫式部日記の和歌」〔日本文学〕一九七二年一〇月号）

⑳ 「平安女流文学のことば」〔至文堂昭四三年）

㉑ 『源氏物語の精神的基底』（創文社昭四五年）